

厚真の虎毛 トラクマ

3部 北海道犬はどこから来たのか？

5章 お父さんの夢

今日は日曜日。春の日差しが地面全体を暖めている。

久しぶりにトラクマに十分な散歩をさせてやろうとお父さんと僕とリナミは自転車でトラクマを走らせながら進んだ。

トラクマの綱は僕が持っているのでトラクマが走るぶんスピードがあり僕はラクチン出来るし楽しくって仕方がない。

「きっとカタクリが咲いているよ」

お父さんに言われて去年のあの場所に行ってみることになった。

トラクマは自転車と競争をして懸命に走った。

特にリナミが走りながら「トラクマ！トラクマ！」と声をかけ挑発するものだからトラクマはとても喜んで「ハアーハアー」しながらリナミの自転車を追った。

途中、線路を渡り、 $\frac{1}{5}$ 分くらい進むと大きく曲がったカーブがあった。僕たちは左側の水田と右側の甜菜（てんさい）畑を見ながら走った。

それから $\frac{1}{0}$ 分ほどして目的の場所に着いた。そこには小川があり、せせらぎがかすかに聞こえた。

頭上では名も知らぬ小鳥の声が聞こえてきた。小川を挟んで左手は少々でこぼこした斜面があり右手には林立した岳樺（だけかんば）があった。

小川にはクレソンが水中に生え川の流れて揺れていた。

そう言えば、だいぶ前のことだった。トラクマの散歩の時、お母さんが野生のクレソンを発見して感動していたことを思い出した。

「自然に生えているのね。クレソンはステーキなどの肉料理に添えて出す貴重なものと思っていたのに。」と言った。ところがこの辺りの人はお浸しや天ぷらにして食べると聞いて、なお、びっくりしていた。

小川から左側の崖下はカタクリの小群生となっていた。

土手に咲くエゾエンゴサクの向かいにもカタクリが咲いている。

「気品があるなあ。」とお父さんが去年と同じことを言った。

お父さんはカタクリの花が大好きなのだ。カタクリは根にデンプンが多く含まれているので戦争中は食用にされたのだそうだ。

デンプンのことをカタクリ粉とも言うけれど、それはカタクリの名前から来ているのだとお父さんが教えてくれた。

「タンポポもカタクリも花屋さんで売られていないことが不思議だよ。だけど、実

際そうならなくて良かったよ。そうになったらタンポポもカタクリもかわいそうだ。」

お父さんは、また去年と同じ事を言った。

トラクマはほとんど走ってばかりいたのでかなりの「ハアハア状態」だったが、目的地に着くなり小川にまっしぐらに駆け出した。そして、がぶがぶ水を飲んだ。よほど走り疲れたのだろう。水を飲み終わった後もハーハーと息を切らし長い舌をダラーっと下げていた。口からは盛んによだれが出、激しく息を吐き目を細めながら草むらに横たわった。

春の光はトラクマにもまぶしいらしい。

リナミはトラクマの首や頭をなでている。

そして、まだ十分休んでいないのにトラクマの綱を手にして小川に沿って草むらの中を歩き回っていた。

僕とお父さんは土手に座ってカタクリを眺めながらおしゃべりをした。

カタクリの咲く周辺の土手にはキジムシロやユキザサなどが咲いていた。ぽかぽかした柔らかい春の日に当たりながらお父さんとおしゃべりを続けた。

「それに・・・」とちょっと考えた風にお父さんは言った。

「お父さんはね、隣の空き地が欲しくなってね、隣の持ち主に土地を売って欲しいとお願ひしたんだよ。だけど、断られたんだけどね。やっぱり欲しかったな。本当は2千坪くらい欲しいよ。」

お父さんがまた言った。

「どうして？」

僕はお父さんの真意がわからなくて聞いた。

確か僕の家土地は102坪で隣の区画も同じだと聞いていたから2千坪と言ったら $\frac{2}{0}$ 区画だから、そんな大きな土地をどうするんだろうって、思ったわけだ。

お父さんが野菜を作ったり花を植えたりするなど考えられなかったからね。

「お母さんに言ったら、草をいっぱい生やしておくんですか？なんて言われてしまったけどね。もし2千坪もの土地があったらね、四隅にキャベツやニンジン畑を作ってモンシロチョウやキアゲハの幼虫をいっぱい育てるんだ。そして、土地の真ん中に土を高く盛り上げてね、大きな高い山を作るんだ。そしてそこにトラクマを放し飼いにするんだよ。」

お父さんは急に楽しくなって来たのか、テンションが次第に高くなってきた。

「そうするとね、トラクマはね、その山のとっぺんに必ず登ると思うんだ。そして360度ぐるーっと見回してね、悠然とそこに立つんだよ。そして、「ウオーウオー」と鳴くと思うんだよね。特に、満月の夜なんかね、月に向かってウオーって遠吠えををすると思うんだ。遠い祖先のオオカミのDNAがそうさせるんだよ。なんか良いな一って思っただね。」

「止めてよ、お父さん！そんなことしたら近所迷惑だよ。」

「2千坪なら大丈夫だよ。」そう言ってから「しかし、心配ないよ。2千坪の土地なんて買えるわけないだろう？」と言った。

さすがにお父さんもそれには問題があると気づいたのか、「単なる夢だよ。実際にそんな大きな土地が買えるはずがないよ。」と言った。

酒を飲んでいる訳じゃないのによくもそんなことを真面目な顔をして言うものだ思ったけれど、トラクマを鎖につながないで自由に走らせる空間が欲しいという点では、僕も同じ考えだった。

6章 お父さんのトラクマ自慢

「トラクマに何か芸を仕込んでいるのですか。」

小学校の先生をしている樽前先生が聞いた。

樽前先生は近所に住んでいる小学校の先生で、お父さんの友達だ。時々、碁をしたり教育問題や社会問題の話をしたりして個人的につきあいのある先生だ。

ところが最近になって我が家で犬を飼ったことから犬が縁でさらに親しくなった。

「今日は天気がいいですね。」

そう言って樽前先生が尋ねて来たのだ。

トラクマをつないでいる鎖は360度クルクル回る鉄の棒につながっているので、トラクマは勝手に右回り、左回りを繰り返している。特に客が来て自分に視線が集まっている時は、トラクマもうれしいのだろう。普段の何倍もハッスルして走り回り、最後には餌入れの鍋の底をぺろぺろなめまわす。そして、両前足で鍋をズーズー押したり引いたりして遊び一通りの儀式は終わるのだ。しかし、見物人がいなくなると、途中で突然それらをやめてしまって寝そべってしまうのだ。やっぱり、トラクマも人と一緒にいるのがうれしいのだろう。

「いえ、いえ、芸は特に何も教えていませんね。ですが・・・特別、何も教えていないのに本能的に身に付いているものがあるのですよ。本当に感心してしまいますよ。」

お父さんが答えた。お父さんの顔が、急に自慢げになっていくことがはっきりわかる。ニコニコ顔で鼻をひくひくさせながら話し始めた。

僕は「また始まった。」と思いながらトラクマの首の下をなでてやったり体を手で突いたり、にらめっこをしりして遊んだ。

「サー来い！」

パーンと手をたたくとトラクマが飛びかかって来るので相撲のようなことをして遊んでいた。

丁度、この日、リナミは友達と遊びに出かけていたが、もし、この場にいたら、トラクマはもっともっと激しく騒ぎまくっていただろう。

リナミがトラクマと遊ぶ時は、決まって「右!」「左!」とか叫ぶので、その都度、トラクマは、鎖をつないだ鉄の棒を中心に右回り左回りをさせられてへとへとにされるのだった。

「この犬は人からもらったものを不用意には絶対食べないのですよ。例えばですね、あの窓からぼーんとお菓子などを投げてやるとしますね。」

お父さんは家の窓を指さして言った。

『するとですね、いきなりパクッとは絶対に食べないのですよ。わざとはずして、臭いをかんでそれから私の顔を見るんですね。食べていいかっていう顔をしてね。それで私が「トラクマ、いいぞ！」って声をかけると、それから食べるんですよ。これって大事なことですよね。この間もですね。トラクマをつれて散歩をしておりましたら、線路の向こう端の農家の方が、声をかけてきたのですよ。「アイヌ犬ですね。精悍な顔をしていますね」そう言ってポケットからパンを出してちぎってトラクマの口元に差し出したんですよ。そうしましたらね、臭いをかぐだけで口にしないのですね。それで、その方がそのままトラクマの前にそのパンを落としたんですよ。そしたらどうしたと思います？　トラクマは、私の顔を見るんですよ。食べて良いかどうか、を聞いているんですね。それで私は「食べて良いよ」って言ったら、食べたんですよ。』

お父さんはすっかり一人の世界に入ってしまった、他が見えないという感じだ。

「この犬は、賢いなーって思いましたね。そもそも、他人の投げてよこした食べ物にいきなり、ぱっと飛びついて口にするとというのは、警戒心がなさ過ぎますね。毒でも入っていたらどうなりますか。その点、うちのトラクマは本能的にそうした警戒心が生まれつき身につけているのですね。」

樽前先生は「はあー、そうですか。それはすごいですね。はーあ、はーあ」と相づちを打っている。

そう言えばあの時から1年半経ったのだ。

僕にも思い出すことがある。

トラクマが我が家にやってきて2か月ほど経った頃、お母さんはトラクマを鎖からはずし近くで遊ばせながら玄関前の氷を割っていた。

その時、トラクマは、1メートルくらい離れてはお母さんの方を見て、また1メートルくらい離れてはまたお母さんの方を見てと、そんなことを何度か繰り返したあと、4、5メートルくらい離れると一気に逃走してしまった。

行き先は平蔵おじさんの家だった。

この一件があつてしばらくは、「トラクマは油断ならんぞー」ということが僕たち家族の合い言葉になった。

「トラクマって頭が良い・・・こんな子犬の時から人間をちょろまかそうーなんて。」という話だった。

最近になって改めて話していることがある。

「トラクマってやっぱり頭が良いじゃない？」で言うことだ。

トラクマはむやみに吠えない。と言うよりは全く吠えないって言って良い。郵便屋さん、新聞屋さん、ガスや電気の検針の人など、定期的な来訪者には全くの無関心状態だ。

初めて来る客であっても我が家に用事で来ていることがわかれば、知らぬふりだ。

「トラクマには状況が理解できるんだよ。本当に頭の良い犬だ。」

お互い自画自賛ならぬ自犬自賛していた。

最近のことで言えば、僕と散歩しているとき、近所のおばさんが、抱いていた座敷犬を手から離してしまい、その犬が吠えながらトラクマに近づいて来た時のことだ。

飼い主のおばさんは「ああー！」って、今にも絶叫しそうになった。トラクマがその座敷犬をかみ殺してしまっただけで大変だと慌てたんだけど、その時、トラクマは知らんぷりして吠えられたままで散歩を続けた。きっと無視したんだと思うんだけどね。

また別の散歩の時なんだけど、いつも遠くから綱をピーンと張り吠えていた大きな犬がいた。ある日、綱から離れてトラクマの側まで近づいてきて、今にも飛びかかろうとしたことがあった。

さすがにその時はいつものトラクマと違って「うー」と唸りだし攻撃の姿勢に入ったことがあった。

相手も同じように唸っただけだけど、そのうち、相手の犬がゆっくりと向きを変えて一回りしてそれからまた2回目ぐるりと回って段々、遠ざかって行ったことがあった。

あの時はトラクマの唸り勝ちだと思った。

「トラクマは普段おとなしいけれどやっぱり強い犬なんだ」と思った。

お父さんの自慢話は続いていた。

「私は仕事から帰ってくるたびに、毎日、煮干しとか、その時によって違いますが、食べ物を一口トラクマにやるのです。ある時ですね、私が渡しかけた煮干しを、トラクマがいきなり、ぱくついたものだからトラクマの歯が私の指に当たったんですよ。瞬間、お互い目と目があったんですがね、その時、トラクマは急に顔をしかめましてね。申し訳ない、そんなつもりじゃなかったんだと・・・あの時は間違いなくそう言いましたね。」

「ええ！」

お父さんの言葉に僕は驚いてしまった。樽前先生は真面目な顔をして何度もうなずきながら聞いていた。

「そして、首を縮めて後ずさりするんですよ。この犬はすごいなって思ったのは、その後なんですよ。次の日、また煮干しをトラクマに与えたところですね、トラクマは口をゆっくり開けて煮干しを受け取るんです。その時以来、トラクマはいきなり与えた食べ物にぱくついて歯が手に当たることはありませんね。」

樽前先生は、盛んに感心して聞いていたけど、そろそろ逃げ出したい気分になっているんじゃないかと思った。

7章 北海道犬はどこから来た？

いつものようにお父さんと樽前先生がトラクマを前に話しこんでいた時だった。

「トラクマ、元気ですか？」

平蔵おじさんと美^{びふえ}笛さんが顔を出した。

「大きくなったね。精悍な顔つきになってきたね。」

平蔵おじさんも美^{びふえ}笛さんもトラクマを見るのは久しぶりだった。

4人で世間話を始めてしばらくしてから、トラクマの首をなでていた美^{びふえ}笛さんが言った。

「そう言えば、昨日のテレビ見ましたか？ イヤー、驚きましたね。」

どんなことだろうかとみんなは美^{びふえ}笛さんの顔を見た。

「昨日、テレビを見ていましたらね、「厚^{あつま}真の虎毛」と同じ虎毛が沖縄にいるんですよ。テレビに出ていたんです。」

そう言って少し興奮して言った。

平蔵おじさんがそれに答えて言った。

「ええ、いるですよ。その犬は沖縄のヤンバル地方にいる犬でね。琉球犬って言うんですよ。琉球犬には赤毛と虎毛がいるそうだけれど、虎毛は赤虎、黒虎、それに白虎までいるそうです。それに虎毛は沖縄の他に山梨県にもいるそうです。」

平蔵さんは、美^{びふえ}笛さんに向かって言った。

「えっ、そうなんですか？」

今度はお父さんは驚いて聞いた。

「山梨県の虎毛は甲斐犬と言うんです。武田信玄の甲斐ですね。そこにも、やはり、「厚^{あつま}真の虎毛」と同じ毛色の犬が生息しているんですよ。赤虎、黒虎、中虎ですね。」

「へー、そうなんですか。それは知りませんでした。それにしても不思議ですね。あんな遠い沖縄に。それに山梨県の山の中にですか？ どうしてそんなふうに飛び飛びに分布しているんでしょうね。」

お父さんは目を丸くして言った。

「不思議ですね。」

今度美^{びふえ}笛さんが言った。

僕はこの間の平蔵おじさんの講義の続きだなんて思って聞いていた。

平蔵おじさんは話を続けた。

「ええ、山梨県だけではなく、長野県の山間部にもいるそうですよ。甲斐の場合も、高さ700メートルから千二、三百メートルくらいの山間部のいくつかの集落にだけいるそうです。周囲は険しい山々が連なっていると言うから、かなり閉鎖的な場所かも知れませんね。丁度、南アルプスの中腹に近いところになりますかね。」

「不思議ですね。そうなんですか。面白い現象ですね。」

お父さんも美^{びふえ}笛さんも、また感心して言った。

「ところでその虎毛の琉球犬も甲斐犬も舌斑があるのですか？」

美^{びふえ}笛さんが聞いた。

「あるんだそうです。全部じゃありませんが、舌斑を持った甲斐犬が3分の1いるそうです。」

「すると北海道流に言えば、みんなアイヌ犬ですね。舌斑はアイヌ犬の特徴ですか

らね。」

「そこがおもしろい所なんです、舌斑は南方系の犬の特徴だとされているんです。例えば台湾犬は赤トラが多いそうですが、台湾犬にも舌斑があるそうです。それにインドネシアにもバリ島とか他にも虎毛のいる島があるそうですよ。それぞれ舌斑を持っているそうです。」

平蔵おじさんが言った。

その時、何度も話に入ろうとしていながら、その都度、話を取られてしまっていた樽前先生が言った。

「私、話していいですか？私にも話させて下さいよ。」

「どうぞ、どうぞ」

樽前先生の言葉を聞いた3人は笑いながら話を始めることを勧めた。

樽前先生は息を大きく吸い込んでからおもむろに話し出した。

「ある大学の先生で日本犬はどこから来たのかを調べた人がいるんです。何でも2500頭以上の犬の血液からタンパク質の遺伝子16種類を調べたそうです。すると、日本犬と西洋犬の遺伝子の配列が違うんだそうですよ。そして、今の話にも関連するのですが、日本犬の中でも北海道犬と琉球犬だけは本州の日本犬が持っているあるタンパク質の遺伝子（注）を全く持っていないのだそうです。そして、おもしろいことに先ほど出ていた台湾犬やインドネシアの島の犬も、本州の日本犬が持っているある遺伝子の型はほとんど持っていないそうです。つまり、北海道犬や琉球犬と台湾犬、インドネシア犬は共通の遺伝子型で連なっているというのです。」

「ええ！そこまでわかっているのですか？」

今度は平蔵さんが驚いて聞いた。

その時、樽前先生の話聞いていたお父さんが口を開いた。

「それはこの間、NHKのテレビでやっていた話と関係があるんじゃないかな。北海道犬も琉球犬も、そして、台湾やインドネシアの犬も縄文系の犬と言うことになるんじゃないかな。さっき平蔵さんが言った南方系と言うのと同じだと思いますね。きっとそうだと思います。」

お父さんは最後の一言を独り言のように言った。そして話を続けた。

「ずーっと昔、3～4万年ほど前までは日本にはまだ人間は住んでいなかったそうです。そこに最初に渡ってきた人間が縄文人だったのですね。彼らは主に、東南アジア方面から渡って来たのですが、北方からもサハリンを通過して渡って来たと考えられているんです。それに氷河期には日本列島は大陸と陸続きでしたからね、大陸からも来ていると考えられていますね。」

お父さんは、みんなを見回してから話を続けた。

「その後、1万年ほど経って朝鮮半島から弥生人が渡って来て日本人の原型が作られたとされているのですが、縄文人や弥生人が日本に渡って来たとき、犬と一緒に連れて来たと言われていますね。それが縄文犬、弥生犬と言うことになると思います。その後、縄文犬と弥生犬との交配が進み本州の犬は新しい日本犬を作ったという

ことになったと思うのです。ただ、弥生人は北海道と沖縄には、ほとんど来ていないらしいんですよ。ということは弥生犬も来ていないということになりますから、それで今日まで縄文犬が北海道と沖縄に残されていると考えても良いのじゃないかと思えますね。」

「ええ、そうですね。私も同じ考えですね。つまり、本州の日本犬は最初に住みつけた縄文犬の遺伝子と後でやって来た弥生犬の遺伝子と両方を持っているということだと思います。しかし、北海道犬や琉球犬には、弥生犬の特定の遺伝子は持っていないということではないでしょうか。私が読んだ別の本にも、犬に関する本じゃないのですが、そんな内容のことが書いてありましたね」

樽前先生がそう言った。

「なるほどね。そう理解するとわかりやすいですね。では、甲斐犬はどうなんでしょう？ 甲斐犬にも虎毛がいますがね。」

今度は平蔵おじさんが聞いた。

「それは・・・きっと」とお父さんが言いかけたとき、樽前先生が言った。

「それは場所に関係があるんじゃないでしょうか？甲斐犬は、山梨県の南アルプスの中腹で見つかっていますね。つまり、弥生犬との交配を奇跡的に免れたのではないのでしょうか。それで縄文犬が純血に比較的近い状態で残ったということではないでしょうか？ 確信はありませんが、そんな気がするのですがね。」

「確かにそうしたことも考えられますね。」

今度はお父さんが言った。

「少なくともそうしたことが一定期間続いたと考えられますね。しかし、ある時期になって、虎毛の犬を意識的に育てようとした人達はその地域に現れて現在まで続いてきたとも考えられるのではないのでしょうか？ 例えば、狩猟犬として優れているのでその血統を守ろうとする形ですが。もちろん、私の単なる推理でしかありませんがね。」

いずれにせよ、お互い想像の範囲を出ないことであつたが、そうした話が互いの犬好きの感情を刺激し合って楽しい気分させていた。

「ところで、弥生人が連れてきた弥生犬のことですが、朝鮮半島から渡って来たとする朝鮮半島に本州の日本犬とよく似た犬がいるということになると思うんですがね。何か、その辺に関する話はないんですか？」

^{びふえ}
美笛さんが聞いた。

「いや、実はあるんですよ。」

樽前先生はよくぞ聞いてくれたとばかりに先ほどの話の続きをした。

「韓国古来の犬に珍島（ちんどう）犬とサブサリ犬という犬がいるそうなんです、どちらも血球ヘモグロビンA型という遺伝子を持っているのだそうです。ところが、おもしろいことに、日本にいる山陰柴犬と三河犬が韓国古来の犬と同じ型の遺伝子を持っているそうです。この話も先ほどの大学の先生の話ですがね。」

「それはまた興味深い話ですね。それに、いま、山陰柴犬って言いましたか？」

お父さんが聞いた。

「そうです。山陰柴と呼ばれる柴犬です。」

「初めて聞く名前ですね。普通の柴犬とは違うのですか？」

お父さんは重ねて聞いた。

「柴犬は・・・」と、今度は平蔵さんが口を開いた。

「柴犬というのは、小型の日本犬の総称なんです。飼われている日本犬の8割が柴犬だそうですが、特定の地犬をささないのです。国の天然記念物になった犬の中で唯一、地方名がついていない犬なんです。北海道犬とか秋田犬とか言うようにね・・・。それで、柴犬にはいま話にあった山陰柴の他に美濃柴とか、信州柴と呼ばれるものがあるんですが、現在、柴犬と言えば一般的には信州柴のことを言いますね。」

説明を終えた平蔵おじさんが樽前先生に質問をした。

「ところで、その珍島犬やサプサリ犬は鼠を捕りますか？」

「捕ります！ いや、捕るそうですよ。珍島犬もサプサリ犬も鼠を捕るそうです。」樽前先生は非常に興味深げに言った。

「ええっ！ 犬が鼠を捕るんですか？」

お父さんも美^{びふえ}笛さんも驚いて声を上げた。

「ええ、犬が鼠を捕るんです。韓国の犬も鼠を捕るんですか？ 実は山陰柴犬も三河犬も鼠を捕ると聞いてきます。」

平蔵おじさんが言った。

これにはお父さんも美^{びふえ}笛さんも驚いた。

「やっぱり、同じ遺伝子を持っていることと関係があるかも知れませんね。それに犬が鼠を捕る話は昔からあったんですよ。」

樽前先生は平蔵さんの話を聞きながそう言った。そして、続けて言った。

「犬が鼠を捕ることを利用して穀物を守るという話です。昔、穀物は屯倉（みやけ）と言われた倉庫にしまったんですが、何と言っても鼠対策が重要だったんですね。それで、鼠対策の犬を飼う専門職とでも言いますか、そんな仕事があったんですね。犬養部（いぬかいべ）と言ったんです。時期的には大和朝廷の時ですね。」

「そんな仕事があったんですか？ それもまた、おもしろい話ですね。確かに、当時にしても、穀物を守るというのは、重要な仕事ですよ。」

「猫は使わなかったのですか？あるいは一緒に使ったとか・・・」

「猫はまだいなかったのですよ。当時の日本には、猫が日本に来たのは、平安時代だと言われてますから。」

樽前先生がそれぞれの質問に答えていった。

「ナニナニ部（べ）と言われていた専門職の話は、たしか、学校で習いましたね。」

今度は美^{びふえ}笛さんが言った。

「それは品部（ともべ）と言いまして、中国や朝鮮からの渡来人で高い技術を持った技術者集団だったんですね。陶器製造の専門家の陶部（つくりべ）とか、織物の錦織部（にしごりべ）とか言いましたから、犬養部（いぬかいべ）というのもその一つ

だったと思いますね。もちろん、犬養部（いぬかいべ）が渡来人だったのか日本人だったのかは知りませんが。」

樽前先生が説明をした。話が難しくなってきたな—って感じになった頃、美笛^{びふえ}さんがちょっと恥ずかしそうにしながら聞いた。

「さっき、天然記念物になっている犬の中で、地名がついていないのは、柴犬だけだと言いましたよね。確かに、北海道犬、秋田犬、甲斐犬ってぐあいにそれぞれ地域の名前が付いていますよね。すると越（こし）っていうのも地名なんですか？ 越（こし）の犬って言いますから。知らないのは私だけかも知れませんが。」

「ああ、それはね、北陸地方のことなんですよ。北陸地方は越中（えっちゅう）とも言うでしょう？ 以前は富山県、石川県、福井県なんかを一括して越中って呼んでいたんですね。越中ふんどしが有名ですけどね。ところが、さらに昔は越中のことを越（こし）の国って呼んでいた時期があったようなんだ。それで、越（こし）の国に住んでいる犬ということから「越（こし）の犬」って呼ばれたんですね。」

平蔵おじさんは、美笛^{びふえ}さんの方を向いて説明をした。

「ああ、そうしたら、コシヒカリという米の名前は、越（こし）から来ているのでしょうかね？ コシヒカリの原産は福井県だそうですから」

「そうなんです。一部にコシヒカリの"コシ"を越後の「越」とか、福井県にちなむ越前の越だと思っている人もおりますが、本当は越（こし）国の"越"なんですよ。」

樽前先生は美笛さんにそう答えてから言った。

「話を戻して恐縮なんですけど、先ほど、塩岡さんが言っていた縄文人が北方からサハリンを渡ってきたという話なんですけど、そのことについて話してもいいですか？」

「いやー、この際ですからいろいろ教えて下さいよ」

美笛さんは、促すように言った。

「ずっと以前にある社会運動家の講演記事を読んだことがあるんですよ。その講演によりますとね、日本の縄文時代の遺跡からバイカル湖の周辺に住むブリヤート人の人骨が大量に見つかったという話が紹介されているんです。」

「ええ・・・？ そうなんですか？ バイカル湖の周辺に住むというからブリヤート人というのはロシア人ですよ？ すると見つかった骨というのは白人のものということですか？」

美笛さんが質問した。

「いえ、いえ、違います。ブリヤート人はモンゴロイドです。現在、そこはロシア連邦の共和国の一つになっていてブリヤート共和国と呼ばれていますが、遠い昔はモンゴロイドのブリヤート人が居住していた地域なんです。ブリヤート人は日本人のルーツの一つだとも言われている人達です。今では、ブリヤート共和国の70%がロシア人だそうで混血が相当進んでいるそうです。」

「どうしてブリヤート人だとわかったのですか。日本の遺跡から出たのに。それに大量に出たって、何体くらい出たんですか？」

平蔵おじさんは尋ねた。

「29体だそうです。その人骨を佐賀医科大学でミトコンドリアDNA鑑定を行ったところ17体がバイカル湖周辺に住むブリヤート人と同じだったというのです。なんでも、茨城県の中妻貝塚から出たものなんだそうですよ。」

「ミトコンド・・・それにDNAですか？なんだか難しい話ですね。」

平蔵は笑いながら言った。

「なぜ、ブリヤート人が北海道まで来たのですかね？」

今度は美笛さんが聞いた。

「マンモスですね。マンモスを追って北海道まで来たと言われてますね。」

樽前先生はそう答えてからまた、話を続けた。

「実はですね、ミトコンドリアのDNA鑑定のほかにも証拠がありましてね、2万3千年前のマリタ遺跡から出たマンモスの骨や細石刃（さいせきじん）という狩のための土器が北海道千歳市の柏台I遺跡から見つかっているのです」

「へえー、そうなんですか？「サイセキジン」って言いましたか？ その名前、初めて聞きました。」

今度はお父さんが言った。

「ええ、そうです。細い石に刃（ヤイバ）と書きます。細石刃というのはですね、黒曜石を割ってカミソリの刃のようにした石片を言うのです。これを鹿の骨につけて槍や銚の穂先にするのだそうです。ブリヤート人はこれを使ってマンモスなど大型の動物を倒したというのです。」

「その細石刃は大きい物なんですか？」

「いえ、小さいですね。2cmくらいですかね。実はですね、千歳から細石刃が出ているという話を聞いた時に、細石刃を見せてもらいに千歳市の埋蔵文化財センターというところに行ったことがあるんですよ。家内と一緒にね。デジカメにも撮ってきましたよ。」

段々、話題が広がって来て、僕にはとてもついて行ける話ではなくなって来た。

でも、この話というのは、要するに北海道犬の先祖は南から来た話と北から来た話と両方あるということだったと思うんだけど、どっちにしても北海道犬は縄文犬であることには変わりはないものと思ったんだ。

(注) 北海道犬と琉球犬の遺伝子にはGMO^gが全くなく全てGMO^aである。所が本州犬はどちらも持っている。

つまり、縄文犬と弥生犬の交配によって、両方、備わったものと考えられる。